10 月 15 日のメッセージ

聖書：フィリピの信徒への手紙　1：　1 – 11

「キリストの日に備えて」

神が造られ、極めて良かったはずのこの世界は、ますます混沌としています。人の手によって引き起こされた争いは、あちらこちらに飛び火しています。

かつて神は同じように地上が混乱した時、あれほど愛し、大切に思っておられるはずの人に対して強く心を痛められました(「主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた。」創世記 6:5-6)。

痛められただけでなく、人を造ったことを後悔されました(「主は言われた。『わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう。人だけでなく、家畜も這うものも空の鳥も。わたしはこれらを造ったことを後悔する。』」創世記 6:7)。

その後の裁きは大洪水という凄まじいものでしたが、神はノアとの契約により、二度と滅ぼし尽くすことはないと言われました(「わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。」創世記 9:15)。

けれども、人間はこの神の約束の上に胡座を掻いていないでしょうか。最悪の結果はないのだから、と自分たちの都合を優先し続けてはいないでしょうか。それゆえ、人と人との争いは止むことなく、今も続いています。神が造られた世界を破壊し続けているのです。

おそらく、イエスの時代にも同じようなことがありました。だからイエスは、人々に警鐘を鳴らされたのです。「このままで良いはずがあろうか。いや、良くない」と（「ノアの時代にあったようなことが、人の子が現れるときにも起こるだろう。ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていたが、洪水が襲って来て、一人残らず滅ぼしてしまった。」ルカによる福音書 17:26-27)。

そして、様々なたとえ話を用いて「目を覚ませ」と呼びかけ続けられました。神が人々を裁かれる時は、いつ何時、来るかわからないのだから、常に自分を吟味せよ、と教えられました(「稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように、人の子もその日に現れるからである。」ルカによる福音書 17:24)。

そして、多く者がイエスの思いに応えて、神に立ち帰り、救いと安心を得たのでした(「主よ、御名を知る人はあなたに依り頼む。あなたを尋ね求める人は見捨てられることがない。」詩編 9:11)。

しかし、それから 2000 年の時が経ちました。振り返れば、人類の歴史は常に堕落と回心の繰り返しでした。そして、今もそれは続いているように思えます……。

「わたしは、こう祈ります。知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。そして、キリストの日に備えて、清い者、とがめられるところのない者となり、イエス・キリストによって与えられる義の実をあふれるほどに受けて、神の栄光と誉れとをたたえることができるように。」(フィリピの信徒への手紙 1:9-11)

今こそ、パウロのこの祈りに耳を傾けましょう。

私たちにとって「本当に重要なこと」は何でしょう。それはやはり、「神の正義が実現されるか否か」ではありませんか。そして、「清い者、とがめられるところのない者」とは、世の不正義に加担しないばかりでなく、その不正義から目を背けることなく、小さくされた者たちのために声を上げる者のことを指すのではないでしょうか。

その歩みは、今の世の流れに棹さすような、少し生きにくいものになるかもしれません。それでも、私たちはいつ「その日」が来ても良いように、常に神の正義を実現する者でありたいのです。神の思いに応える一人となりたいのです。